2022/4/24

ヨハネの黙示録　講解メッセージ⑤

『神の国は来た―ルカの福音書はどのように教えているか』

イエス・キリストは「神の国は来た」と何度も語っておられるのに、多くの人が「人間はこの世界の終わりの日に神に国に入れるかどうかのさばきを受ける」と思っています。「神の国は来た」とはどういうことか、ルカの福音書を通して学んでいきましょう。

> 「しかし、わたしが、神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の国はあなたがたに来ているのです。」（ルカ 11:20）

「神の国」とは、終わりの日に神が悪を滅ぼし聖徒たちを神の国に迎え入れることを指し、これは旧約聖書の時代から幾度も預言されています。その神の国は「あなたがたに来ている」とイエス様は言っておられます。それは、「今向かっているところ」という意味ではなく、「すでに来た」という意味です。聖書協会共同訳では、「神の国はあなたがたのところに来たのだ」と直訳されています。

> 「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしています。」（ルカ 16:16）

「律法と預言者はヨハネまで」と言われているのは、「主の通られる道をまっすぐにせよ」という預言がバプテスマのヨハネによって成就されたことで、神の国が到来するという旧約聖書の預言・約束は完了したということです。その後は、イエス・キリストによって神の福音が宣べ伝えられています。しかし、ただ信じればいいとイエス様が教えているのに、誰もかれも良い行いをすることで神の国に入ろうとしているというのです。

> 「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」（ルカ 17:20-21）

パリサイ人たちの最大の過ちは、神の国を見える国だと思っていたことです。この地上にイスラエルという国家が再建されること、それが神の国だと思っていました。しかしイエス様は、はっきりと「神の国は見える形で来るものではなく、あなたがたのただなかにある。」

と言っておられます。それは、私たちがイエス様の言葉を信じて受け取った時に神の国の中に入れられたということです。

この世界は朽ちる世界ですが、神が約束された国は滅びることがない国です。この有限性の世界に永遠性の国が存在することは不可能です。ですから、神の国はこの世界の外の話なのです。そして、私たちは霊のからだを着せられて、その世界に半分入っているのです。この世界での肉の体が朽ちたら、そのまま天に引き上げられるので、何も心配いりません。肉の体はまだこの世に残っていますが、イエス・キリストを信じる者は、この世の者から神の国の者に変わりました。つまり、私たちにとっての終わりの日はすでに来ていて、あとは肉体の死と同時に天国に行くのを待つ身になったということです。

■終わりの日までに起きること

私たちが肉体の死を迎えるまでの間に何が起きるのかについて、イエス様は次のように語っておられます。これを黙示録と言います。ヨハネの黙示録は、この後イエス様が語られた内容を詳しくしたものです。

> 「あなたがたの見ているこれらの物について言えば、石がくずされずに積まれたまま残ることのない日がやって来ます。」彼らは、イエスに質問して言った。「先生。それでは、これらのことは、いつ起こるのでしょう。これらのことが起こるときは、どんな前兆があるのでしょう。」イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私がそれだ』とか『時は近づいた』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現れます。」（ルカ 21:6-11）

「石が積まれたまま残ることはない」とは、目の前にあるものが滅びる時ということであり、すべてが終わる日です。それは、一人一人の肉体が終わる日です。つまり、人がこの世での死を迎えるまでの間に、誰の人生にも起こることについて、象徴的な言い方で説明がされています。

まず「偽キリスト」です。どのような時代にも、自分が神だという人が必ずいますが、そのような惑わしに騙されないようにと、イエス様は注意を促しておられます。イエス・キリスト以外に救いの道はありません。これが、イエス様が最初に語られたことです。

続いて、争い・戦争です。戦争のない時代はありませんでした。その時、世界が滅亡するに違いないと人々が慌てふためいて混乱したこともあります。しかし、それで世が終わるわ

けでも、そのままあなたが終わるわけでもありません。

次は、災害や天変地異です。それらは神がすることではなく、悪魔のしわざによって有限性になってしまったことの帰結です。悪魔がアダムとエバをだましたことによって、世界に死が入り込みました。死という有限性が入り込んだことによって、さまざまな制約が入り込み、制約が神と私たちを遮断し、人間は自力で生きなければならなくなったため、食物連鎖が生まれ、病気が入り込み、この世界は滅びと再生を繰り返すようになったのです。その過程で様々な天変地異が起きるようになりました。誤解しないでほしいのは、神が天変地異を起こしているのではないという点です。むしろ神はそこから人を助けようとする方です。天変地異がない時代もありません。いろいろなことが起こってもあせらないようにとイエス様は教えておられます。

「しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。それはあなたがたのあかしをする機会となります。それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。しかしあなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにまで裏切られます。中には殺される者もあり、わたしの名のために、みなの者に憎まれます。しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。」（ルカ 21:12-19）

次に語られたことは、迫害です。イエス様は、この先、弟子たちが迫害を受けることがわかっていました。今日、私たちには弟子たちのような危険はなくとも、この世界はイエス・キリストを信じる人たちを迫害する世界です。しかし、それは逆に神を証しするチャンスになります。

たとえば、今日の世界では無神論がクリスチャンを迫害します。それを裏付けるように、日本では自分がクリスチャンであることをなかなか告白できないという統計結果があります。それは裏を返すと、隠れた迫害があることを表しています。神を信じるのは弱い人間のすることだという風潮や進化論があるため、神が人を造ったとか聖書の奇跡などを信じているとバカにされてしまうのです。こうして、人からどう思われるだろうかと不安になり、クリスチャンであることが告白できず、周りに合わせて意見を同じにしておくということをしてしまうのです。あなたにも同じような経験があるのではないでしょうか。これが今日の迫害の一つの形です。私たちはこれを人生の中で何度も経験します。しかし、それは、神を証しする機会です。そのような時、自分で何と答えてよいかわからなくても、神様が助けるから心配いらないと語られています。

特に、クリスチャンになった時に最初に迫害する人は家族ということが多々あります。しかし、そのことが、家族が救われるチャンスとなったという証しも数多くあります。

私たちは生きている間に様々な苦しみに会いますが、必ず神様が助けてくださいますから、絶対に大丈夫です。聖書は、「試練と共に脱出の道が備えられている」と教えています。私たちは必ず助けられますから、むしろ、迫害する家族や友達のために祈りなさいとイエス様は教えておられます。

> 「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都に入ってはいけません。これは、書かれているすべてのことが成就する報復の日だからです。」
>
> （ルカ 21:20-22）

「エルサレム」とは、この世界で最も重要な場所という意味です。これは、人の人生に起こることの黙示ですから、あなたの人生にとって最も重要な場所である命の危険を迎えた時、つまり自分の死を目前に控えたら、私たちはどのように迎えるべきなのでしょうか。

イエス様がこのような表現で語られたのは、歴史もまた、このような状況を迎えることがわかっていたからです。この後、ユダヤ戦争が始まり、ローマとユダヤが戦って実際にエルサレムが陥落しました。その時人々はヘロデが築いた砦に逃げましたが、最終的にはそこも73年に陥落した歴史があります。イエス様は、このことに重ねて語っておられるのです。

> 「その日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨むからです。人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。そして、日と月と星には、前兆が現れ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。」（ルカ 21:23-26）

いつ誰に死が訪れるかは誰にもわかりません。「御怒りが臨む」とは、「異邦人に踏み荒らされた状態が終わらせられる時」のことで、肉の体が終わる時のことです。誰の体も衰え、多くの器官が機能しなくなり、肉体は荒らされた状態になり、死を迎えます。

とにかく誰もが死を経験するのは間違いのないことなのですが、その日の近づいていることを知ると、どうしても人々は不安に陥ります。死、それは世界の終わりです。

「そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上に上げなさい。贖いが近づいたのです。」（ルカ 21:27-28）

そして、いよいよ死を迎えたその時、イエス・キリストがあなたを天に引き上げてくださるという結論で、一連の話が終わります。

この話はもともと何から始まっていたでしょうか。「神の国はいつ来るのか」という問いに対する答えです。イエス様は、肉体の死はいつ来るのかについて語り、その間に起こることについて話されたのです。私たちは死ぬまでにイエス様を証しする機会が何度も訪れるでしょう。また、世の中の困難な話をいくつも聞くでしょう。だからといって、あなたが死ぬわけではありません。あなたが死ぬときには必ず兆候があり、その兆候が表れたら、気を失うほどの不安に襲われるものですが、その時には神が天から来て、あなたを贖うために引き上げてくれるから、何も心配することなくまっすぐに頭を上に上げなさいと、イエス様は語られました。

「それからイエスは、人々にたとえを話された。「いちじくの木や、すべての木を見なさい。木の芽が出ると、それを見て夏の近いことがわかります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい。」（ルカ 21:29-31）

「自分の肉体の死の兆候があったら、神の国は近いと知りなさい。」とイエス様は語っておられるわけですが、直前まで「神の国はすでに来た」と語っておられるにも関わらず、「神の国は近い」というのは、非常に矛盾したことのように感じます。どのように違うのでしょうか。

実は、「終わりの日」には二つの意味があるのです。一つ目は、イエス様を信じた時です。この時、私たちは死からいのちに移されましたが、まだ肉の体は残っています。そこで二つ目は、肉の体を脱ぎ捨て、永遠のいのちをもって神の国に移り住むときです。イエス様は、この時のことを指して、「神の国は近づいてきている」という言い方をしておられるのです。つまり、霊のいのちをいただくときと、復活して実際に神の国に入るときの両方を神の国と呼び、今私たちはまだ肉の体を脱ぎ捨ててはいませんから、その日に向かって、神の国は近づいたという鋳方をしておられるのです。黙示録は、それまでの間に何が起こるのかという書です。

「まことに、あなたがたに告げます。すべてのことが起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み

込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。その日は、全地の表に住むすべての人に臨むからです。しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」

（ルカ 21:32-36）

私たちの人生には必ず患難がありますが、神のことばは決して滅びることはありません。肉体の死はいつ来るかわかりませんが、必ずすべての人に臨みますから、何が起こってもあなたは大丈夫なのだから、その日のために油断せず祈り続けましょう。それは、神と交わって信仰に立ち、あわてふためくことのないようにするためです。これらのことを伝えて後、イエス様は十字架に架かりました。

「さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」（ルカ 24:44-49）

この地上では、死が入ったために、苦難に会います。しかしこの神の約束がすでに成就したのですから、動揺したり、惑わされたりしないで、宣べ伝えていきなさいと励ます目的で書かれたのが黙示録です。

ヨハネの黙示録は、人々を脅すためではなく、励ますために書かれた書です。困難の中にあっても希望を持つために書かれたのです。ルカの福音書では、イエス様ご自身がこのことを語っておられます。惑わされることなく神からの平安を受け取りましょう。

「このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおり、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。」（Ⅰテサロニケ 3:3）